

舞踊教育における創造性の開発 (1)

高 橋 春 子

序 論

舞踊が、因習とかたくなな伝統の世界から開放され、自由な人間性の表現形式の地位を獲得したのは、近年のことである。

定形化された動きと、手順によって構成される観賞的芸術としての舞踊から、生き生きとした自由な感情や思想等を、時代に、社会に訴える芸術としての舞踊に発展してきた。

舞踊としての主張は、その表現形式の特質から、時間的・空間的な制約を受けざるをえないが、先に空間的制約について、表現手法とその内容との関係を考察した。

主張が舞踊として表現されるためには、それが模倣であってはならない。創造された意志的行動でなければならない。昨今の舞踊教育は、形式的手法の伝達のみで、この表現の本質が見失われている感がある。今回は人間の創造的資質の育成過程とその舞踊への適用について考察する。

I 現代社会における創造性の教育

戦後の日本は、全世界の人々が目を見はる中を、急速に、産業・文化の遅れを取りもどし、基礎的な知識、経験、技術も伴わないままに、国際競争の渦中に巻きこまれてしまった。従って、そこには、真の創造力は全く見られず、直接、先進国の技術、機械を買い入れ、先進国で体系づけられた学問を、現象の中に体系を見い出す努力もなしに受け入れ、先進国の人々の血と汗で生み出した思想を頭にのせ、模倣思想、模倣教育、模倣技

術等、上から下まで借り衣裳で身をつつみ、歩き始めたのである。しかも、その模倣も、あくまで表面的な模倣でしかなく、心の真髓までも模倣するに致らなかったところに、一層そのもろさがあった。そして、未だにその地点から脱皮しきれず、それが日本の発展に大きくマイナスの影響を及ぼしているのは事実である。

創造性の開発は、世界的なブームを呼び起こし、ここ数年来、急激に叫ばれることとなった。産業界に端を発したこの風潮は、最近、教育界にもその波がおしよせ、新たに注目されてきたが、まだまだその具体化は充分にされていないのが現状である。

教育には「文化の継承」と「文化の創造」という二つの大きな機能を有しているが、ここからも、文化を創造し得る人間の育成の必要を、うかがい知ることができる。

一般に、従来の人間の能力観は、知能中心のものであり、かなり永い間、その考えが中心になっていた。

しかし、人間には記憶と再生の能力を主とする知能の他に、生産的思考、独創的思考を主とする創造性能力があり、その能力の開発が重要視されはじめてきたのである。

戦後の日本の教育は、高度大衆教育の段階に突入し、義務教育の普及率は世界でも高い水準に達したのであるが、最も大切な教育の方法が省みられなかった。それは、画一的な知識の詰め込み主義、記憶学習中心の知識の習得や、機械技術の習得による教育が、拡大、強化され、自分で主体性をもって、問題意識をもち、自分で考え、創意工夫して問題の解決にあたるといふ、創造的思考力の育成という点が、なおざりにされてきた傾向が強いといえる。

これは、永い間、学校では人間の潜在能力は、知能検査の結果を重く用い、知能に対する固定観念の上に、記憶、再生の能力を重視してきた。そして、その成績の良いものが、英才としてもてはやされてきた。

しかし、やがてそうした従来 of 知能検査の結果を疑問とする数多くの学者が現われることとなった。

その中には、J. P. Guilford, C. W. Taylor, E. P. Torrance 等の研究者がいて、彼等は、学業成績、教育年数、知能検査得点が、創造性と大きな相関を有しないこと、しかも、それらが将来の社会的、研究的業績に対して、ほとんど相関関係が認められないこと等を明らかにした。¹⁾ そうして、創造性の開発が注目されてきた。

昔から創造性能力というのは、天才的能力であり、ごく限られた少数の者だけに、神から生まれながらに授けられた能力のごとく、神聖視されて考えられてきたが、人間には、それぞれ個人差はあるが、誰にでも、生まれながら創造性その他の能力を持っているのである。天才といわれる人々も、生まれながらの優秀な素質だけでなく、環境その他多くの外界からの影響が、大きく作用しているのである。そして、社会は少数の天才よりも、すべての人間の潜在的能力を、無限に開発し、多数の創造的人間を生み出す必要を痛感したのである。

この創造性能力は、人間生活において当面する、いくつかの問題の解決にあたって、今まで習得した知識、経験を駆使して、新しい方向を見つ出す能力である。²⁾

すべての個人にねむっている創造性能力を、どのようにめざめさせ、伸長していったらよいか、さらに、これからの時代はあらゆる面での活動は、チームの成果が期待される時代である。チームの中において、個人のもつ能力を充分発揮して、チーム全体が最大の効果をあげるべく努力し、社会性と個性とを兼ね備えた創造的人間を育成していかなければならない。

さて、こうした創造性を育成する教育は、いかにあり、いかに行なわれるべきであろうか、具体的にいくつか条件を取り上げて考えてみた。

1. 自由な風土

人間の尊厳のもとに、自発的に主体性や創造性をはぐくむことのできる、暖かい受容性と理解ある雰囲気をもった環境においてこそ、創造性が育ち、ひいては、その環境に反応し、新しい環境を創り出していく力を持つことになる。この場合の環境は、広く宇宙、世界から、日本、地域社会、

学校、さらには、学級、グループ、家庭に到るまで、すべての場において、そうした自由が、先ず最初に必要な条件として考えられる。

例えば、国家権力による教育統制の強化等は著しく創造性をはばむ問題として考えられるし、創造的な学級づくりは、個人のみならず集団の創造性をも、伸長するものである。

2. 文化的要素

創造性は、文化によって規定される。子供は特定の社会・文化の中に生まれてくるものであり、接触する文化が高い資質を備え、その中で、基礎的な知識や技能を身につけ、論理的な思考が出来ることが必要である。

創造は、過去・現在の文化の既存の要素を新しく結合したり、それらを修正したり、加工して、新しい文化要素をつくり出す能力である。³⁾ 無から有の創造は考えられないものであり、文化要素が豊富であることが、大きな要因となってくる。

そして、文化要素の必要と共に、その中から適切な刺激を感じ取り、自分で問題を見つけ出し、解決する能力や態度が養われなければならない。

3. 環境の整備

教育は、創造性にめざめる能力を促進する働きかけであり、そのためには子供の住む環境を、常に多くの興味と適切な刺激のある環境づくりをする必要がある。この場合の環境の整備とは、設備が備わっていることが大きな問題ではなく、創造力の発現に必要な、豊かな感受性の育つ環境をつくることであり、その中でこそ、何ごとに対しても敏感に反応出来るような感受性を高めることができるのである。

又、こうした環境を指導者が作って与えること、さらには、指導者と生徒が共にそうした環境を作り上げることが大切である。

そして又、適切な時間に適切な刺激が与えられることも必要であり、継続した刺激は人間の神経をまひさせ、かえって創造性を失うことになる。時々には心の散歩をさせることが、次の創造へ結びつくことになるだろう。

4. 社会的要請

最近、アメリカをはじめ、わが国においても創造性の開発が注目されて

きたが、これは現代という時代の要請であり、社会的・歴史的な要請はいつの時代でも、必然的に創造性を育てる教育を必要とし、創造性に基づく教育研究が盛んになってくるのである。

創造性の教育が、こうして一定の領域と強度をもった社会的要請となったとき、はじめて少数の創造的人間から、多数の創造的人間を量産する可能性が生まれてくるのである。

5. 教育の目標、内容、方法

人間形成という教育目標を達成するために、すべての教科はその領域で実現すべき目標を設定し、発達段階に応じて、又地域社会の特殊性を考慮に入れて、適切な内容を定め、民主主義的方法でそれを実現させなければならない。

知識教育や技術教育を中心に、教育者が身分的序列をもって、上から一方的に指導する伝導的権威主義の教育、そして、系統学習のもとに、画一的な知識の詰め込み主義の教育からは、主体性をもって自己の内から問題を発見し、解決していくことは不可能に近い。これは現在も多方面から問題視されているが、高度大衆教育の必然的結果として、学習すべき知識の量がふくれ上がり、決められた時間数の中でそれをこなすだけの能力が子供になく、考える時間を与える余裕がないことや、過激な入学試験に支配された教育、マス・プロ教育等に原因があるのではなかろうか。

又、一方では問題解決学習のはきちがえから、ほったらかしの教育が奨励されることも、現代教育の問題点である。

こうした困難を解決し、真に創造的な教育、子供達にその創造的潜在能力を自覚させ、自己の内外の現実を直視して、主体的に内面的に洞察し、発見していく能力・態度を養うことが可能となるような教育が、切に望まれるのである。

6. 固 定 観 念

人は、人や社会の作った固定観念により、自らを破滅させることが多い。

固定観念というのは、社会の価値観や物の見方を、先入感や自己観念でしばったり、文化や社会の制度、習慣等による外部からの圧迫感を意識し

たり、劣等感や性格により、自分自身を拘束したりすることである。これにより、自由で柔軟な思考力、自主的判断力も失われ、受動的、内閉的で現実から逃避的になり、現実の社会や自己を素直に、冷静に事実をありのままに理解することができなくなってしまうのである。そして、自然な相互援助的人間関係や社会生活を維持することができなくなってしまうのである。

7. 教育者のあり方

教育者というのは、自分では意識しない間に固定観念のとりこになりがちなものである。よほどの努力をしないかぎり、知らず知らずのうちに創造性を自ら失う性格を有している。

例えば、一般的に能力の尺度を知能検査の結果で判断したり、学業成績が良くて自分のいうことをよく聞く、おとなしい子をいわゆる「よい子」としてかわいがる傾向が強い。そのため、多くの子供はできるだけ先生の気に入る「よい子」になろうとし、主体性のない無気力な型にはまった、失敗をおそれて縮した子供ができ上がっていくのである。たまたま現われた批判的態度の子供は、「変わりもの」「いうことの聞けぬひねくれた子」として、自分の殻にはめる懸命の努力が続けられる。しかし、ごくまれな少数はそれにも同化せず、自分の方向をゆずらぬため、ついには互いが無視することにして、解決させたるする。しかし、こうした中で自己を失わぬ者は非常に数少なく、存在価値の高いものである。

こうして教育者は、自分の作った枠の中で、固定観念のカビだらけになって過ごしていくうちに、視野の狭い柔軟性のない、生物的生命の存在価値しかない人間になってしまうのである。そして、自己の人間性を消失させるのみでなく、無限の可能性をもった、無数の卵をもつぎつぎとそのカビでおおいつくしてしまうのである。このようなことがあってよいはずはない。

教育活動は、教師と生徒との相互作用による創造活動である。これを展開していくには、教師が敏感に反応する豊かな感受性をもち、創造的で知的好奇心を失わないことが必要である。

そして創造的な教育者は、自己の中に潜在する創造性を発現し、さらに子供の中からもこれを見出し、育成することができなくてはならない。子供の自由を尊重して必要以上に助言して無理に自分の思う方向へ引きこむことなく、適切な発問や暗示、助言により、正しく導くことが大切である。生徒の人格と創意を重んじ、これを実現させるために、暖かい受容性と理解ある雰囲気をもって接することもわすれてはならない。又、教育の場の秩序がみだれることを必要以上に恐れたり、自己の権威や統制力を保持するために、又、外観者への体面を保つために、さらに自己の計画を予定通り行なうために、「社会的適応」のもとに「しつけ」を重要視しすぎる感がある。必要以上に「あれをしてはいけない」「これはだめ」「こうしなさい」「あしなさい」という教育は、子供の自発性、創造性の芽をつみとることになる。子供の失敗を恐れすぎることなく、極限への追求をさせたり、未知なものへ探索させたりして、自分なりに解決の道を発見させてみるという態度も必要である。

又、個人の思考を無理に集団と同調させようとする有形無形の圧力をかけないこと、マンネリ化した指導法を改めること、子供の中に入って子供の経験するところのものを本当に知ること等、教師と生徒が互いの人格のふれあいの中で、心の交流を生み、彼等の創造性を正しく感知し、伸ばしていくことのできる、ゆとりある人間的魅力を備えた、全人的にすぐれた能力の教育者であるべく努力しなければならない。

8. 発 達 段 階

創造性の開発を人間の発達段階の観点からとらえ、それに適した教育方法を考えることもまた大切である。これは5で取り上げる問題であるが、特にその重要性から考えて、改めてここで考えてみることにした。

これをさか登って考えていくと、生命の起こりである単細胞から見ていかねばならない。無限の可能性をもった単細胞は、主体性をもって生命の起源となり、独自の胎内で独自の胎教により成長し、外界での生存能力ができると自らの力で誕生し、人間社会の空気を吸い、独自の初声を上げる。

本来、無限の創造性を有した生命の可能性は、その後の条件でどのようにでも変化されるものであり、それだけに、彼等を迎える我々がどのようにあるべきか、真剣に考えなければならない。

生まれたての子供でも、大声で泣く子、ヒクヒク弱い声で泣く子、体の動かし方も違えば、初湯や室の温度等の好みも違うし、乳の吸い方にいたるまで、こうした反射的な行動をしているだけの時期においてさえも、驚くほど個人差があるものであり、この個人差と子供のおかれた社会的環境による影響は、将来の創造性につながるものと思われる。

例えば、近年共働きの増加に伴い、誕生して間もない子供を乳児園等の施設に預ける人が多くなってきた。そこでは、すべてが画一化された生活であり、すでにこの段階で個人差は縮小の方向へ向けられ、個性は育ちにくく、創造性の伸長をはばむことになる。

乳児はその発達段階に応じて、外界からの刺激にいろいろな反応を示し、自分の気持や欲求を声や体の動きで表わす。そして座ったり、はったり、よちよち歩きが出来るに従って、その行動範囲の広がりや心身の発達により、その表現力も増し、活発化してくる。自分の足で自由に歩くことができる頃には、音楽等の刺激で踊ったり、砂や紙、積木等で自分の好きなものを作る喜びを発見しだす。

二歳頃では、遊び道具を友人と同じように思い、それに合わせて遊び、しかも、ちょっとしたはずみでその遊びもつぎつぎと変わっていき、永つづきしない。物の名前も動きや機能などをごっちゃにしてよび、定まった形をとらない。積木や絵を書く遊びでは、自分で主題や内容をもって表現するようになる。二歳も半ばを過ぎると、平面の特徴を感じ取るようになるし、ことばもできてきて意志表示が明確になってくる。

三歳児は、まだちょっとしたはずみで遊びが変化するが、その数が少なくなり、遊び道具を自分達の目的に合わせて活用するようになる。そして5・6人の友人と集団を作り、同じ目的の遊びを楽しむ。しかし、協力の態度はまだあまり見られず、集団の存在も不安定である。物の名前も正確に言えるようになり、線・面・空間・時間の存在と特徴を意識しはじめる。

原因・結果の関係はまだぼんやりしていて、分離して考えられず、伴って起こると考える。

四歳児では、遊び道具を物と考え、自分達の意図に合わせて活用し、共同して遊ぶようになり、自意識ができてくる。そして、集団を一つの存在として認めはじめ、協力して活動するようになる。二つの集団で競争して遊んだり、ルールを決めて遊んだりもする。この頃から、分類された分野での構造に注意が注がれはじめるため、領域別の教育が始められてもよい。しかしそれは、知識や技能を断片的に教育するのではなく、全体的な統一をもたせながら、科学的に行なわれなければならない。原因と結果をかなり区別して考えるようになるが、その関係を把握できない。ものごとの分析的な把握は、ばらばらに認めるようになり、全体的な統合的な把握は、ぼんやり大ざっぱにつかむことができる。

五歳児では、遊び道具を自分達の意図に適合させて活用し、ルールを利用して、グループみんなで遊ぶようになる。ものごとを分析して把握したり、全体的総合的に把握する能力もできてくる。又、原因・結果の区別もはっきりとらえることができてくる。⁴⁾

リゴン (Rigon, E. M. 1957) の報告によると、「子供は生まれてから一年の間に、想像力が発達しはじめる。二歳から四歳においては、想像力を刺激するものを与えられると、新しい経験を通して、新しいものの発見の喜びを得ることができる。四歳から六歳においては、ほとんどの子供が想像力をもつ。しかし五歳頃を中心にして、想像力が一時減少する傾向がみられる」といっている。⁵⁾

大脳生理学の上から言って、創造性は前頭葉の働きに関係するといわれ、これは、五・六歳頃から活発な働きをするといわれる。⁶⁾

こうして考えてみると、幼児期は人間の一生を支配する性格の基礎が出来上がる時であり、乳児期に比較してその行動範囲も広がり、家庭の中の人間関係から、友人、近所の人々、幼稚園の友人、先生等の関係へと拡大され、見るもの、聞くものが真新しく、つぎつぎと新しい経験が積み重ねられていき、その中から多くのものを吸収し、性格や態度等が形成され

ていくのである。この時期はまたいろいろな表現手段により、自己を表現し、それに喜びを見出す時でもある。こうした幼児の特長を見てみると、彼等を取りまく人々の態度や環境、導き方から受ける影響は非常に強く、それが将来の創造的人間形成に大きく方向づけられるのである。子供を受け入れる社会や集団が創造的気風を持ち、子供の好奇心、探究心、行動性、個性等を大切に、幅広く多方面の経験をさせ、画一的な物の見方をさせないようにすることが大切である。さらに、興味、関心の芽を自由に伸ばすよう配慮してやり、必要な知識、経験の吸収には援助してやることも必要である。

幼児の生活は、ほとんどすべて遊びである。遊びの中にこそ、幼児の生命力をくみとることができる。

例えば、そのためには創造性を育てることのできるような玩具を与えるようにしたい。子供は高価なおもちゃを与えられて、「こわしてはいけない」といわれるよりも、母がありあわせの材料で作った形のわるいぬいぐるみや、父に日曜大工で作ってもらった木馬等をどれほどか喜ぶものである。父や母が作る過程に参加して、共に創造の喜びを味わい、工夫する態度やものを大切にする態度等も自然に生まれてくるのである。

即製のおもちゃにはすぐあきてしまうが、木切れ、空箱、粘土、紙、布、ゴム、空カン等では、長い時間いろいろな遊びを考えては夢中になって過ごすものである。

又、絵本の中には、近頃知識の詰めこみ式のものや、子供が原色を好むものときめて、けばけばしい色彩を使ったもの等がみうけられるが、豊かな想像力の育つような美しい色彩と美しいことばで表わされたものが望ましく思う。こうした本は幼児に夢を与え、自分が主人公になって空想をめぐらしたり、自分で物語をつくって友人達に聞かせたりするようになる。

又、幼児は目が覚めている限り、片時もじっとはしていない。彼等は身体活動を好み、ごっこ遊び、模倣遊び、ジェスチャー遊び、競争遊戯等全身をぶっつけて遊びまわる。こうした遊びは、心身の発達にとって欠くことのできない栄養分となる。

そして又、幼児期は芸術（音楽、美術等）、体育（遊戯、表現）、は、創造性を伸長させる教育の手段として、非常に効果的なものである。

幼児を一人の主体性のある人間として扱い、伝統にこだわって子供の能力を決めこんだり、知識や技能を詰めこんだり、しつけを重視しすぎたりして彼等を固定化させないようにしたい。二歳から三歳にかけて、自我意識も芽ばえてくる。彼等の関心や意図を土台にして、目標をはっきり定め、各領域の分析された内容をもとに総合した科学的な教育が行なわれなければならない。現代の子供は、数や文字等についての知識や技能のレベルも高い。これは彼等の生活がそうした知識を豊富に有する環境にとりまかれているためであるが、それらを統一したり、総合して判断する見方ができていない。こうした現代っ子の実情を知り、そのかたよった見方や誤った世界観というひずみから救い出し、積極的に可能性を引き出してやらねばならない。正しい見方、世界観に基づいた教育に基礎づけられて得たものを自由に駆使することから、創造性が生まれるのである。

さて、七・八歳頃からは抽象的な思考もできるようになり、⁷⁾ 時実利彦氏によると十歳頃から時間関係（歴史的）の理解もできるようになるという。

小学校の時期は、具体的思考から抽象的思考へと移り変わりの時期である。⁸⁾ しかし、十二歳頃の抽象的思考はまだ限界がある。

トーランス（Torrance, E. P.）によると、小学校六年は創造性の伸長する時期であり、中学二年では逆に減退する。高校一・二年は再び伸長する時期である、⁹⁾ といっている。中学二年という時期は、第三反抗期で、自我意識が強く、社会の固定観念や権威に反抗する。身体的には性的成熟期であり、心身共に安定性を欠き、自己中心的で懷疑的で自分の殻に閉じこもりがちである。従って、この時期は将来の伸長期へと脱皮する準備期であり、まわりの者は忍耐と愛と理解で見守り、無理に押えることなく、自由に自分で考えさせてやる必要がある。

又、受験のための暗記中心の詰め込み主義の教育は、いずれの時期においても創造力は減退する。

子供の創造性をはばむ障害の多い現実をみつめ、発達段階の特徴を重視し、それぞれの段階に応じて適切な教育が行なわれなければならない。

以上、創造性を育成するために必要ないくつかの問題をとり上げ、考えてみたが、教育の場ではそれらをばらばらの活動としてとらえるのではなく、統一した信念のもとに一体化をはかって行なわなければならない。さらに、家庭、学校、地域社会、国、世界とのつながりのもとに、広い教育社会の視野に立って、総合的に開発されなければならない。

現代の子供達が成長した頃は、現在とは比較にならない程、さらに科学技術の発展に伴う創造性開発の要請が高まっていることであろうし、それに伴い、それ以上に人間自ら主体性の回復、「人間疎外」「人間不在」「教育不在」を克服する大きな力を必要とすることであろう。

創造的人間形成の道を開くとともに、創造的社会の建設を実現することのできる道を開拓していくことが、現代教育の課題であろう。

Ⅱ 舞踊教育における創造性の開発

さて、このように、創造についていろいろ考えたのであるが、ここでもう一度、一体何のために創造したり、創造性の育成を叫んだりするのか考えてみたい。

それは、とりもなおさず人類の幸せのためなのである。

人生のひとこまひとこまが、生命力にみちた、豊かな人間的価値にあふれた、幸福な生活をおくるためにほかならない。

人間の幸せの条件はいろいろある。例えば、精神生活が満たされていること、身体が健康であること、物質（衣・食・住）が豊かであること等であり、それ等はいずれを欠いても人を不幸にする。

幸福の尺度は、人間の精神作用によるものであり、それは人間の人間たるゆえんでもある。体が病気で物質的に恵まれぬ者でも、精神的な生きがいのある者は幸せであり、一方、アメリカなどのように、恵まれた資源と機械文明は、高い生活水準をもたらしたにもかかわらず、依然として不平

不満に満ちており、青少年の非行・墮落、あいつぐ暗殺事件、人種問題等多くの問題をかかえ、窒息しかけている現状である。最近の日本においても、十歳未満の「ちびっ子犯罪」が急カーブで増加している。その動機は、物質的欲求からではなく、自己顕示で認められたいとか、万引という行為で自分の力を表現したいとかいうのがほとんどだということだ。

これ等は、物質的な満足は、精神をも満たし得ないことを明示している。

創造の行為には、精神・肉体の二面があるが、これらが常にバランスをもった行為として行なわれる必要がある。

創造目的が、生きるための手段としてのみ行なわれるのではなく、創造することを目的に、精神的喜びを感じるものでなくてはならない。

そうした創造性のもっとも重要な観点から考えて、舞踊は人間の身体運動を通して、自己の内なる（しかもこの自己は、個人だけの問題にとどまらず、社会化されたものへと発展していく）感情、思想等を、我々の生活や自然の中から純粋に、全人的感動をもって創造するものであり、それは魂をもつ人間の身体活動により、主体たる人間自身の問題をとり扱い、極めて独創的で、高度の精神的欲求に対応するものであり、その行動はすべての過程が創造であり、この教育的価値は、きわめて高いものといえる。

舞踊は教育の分野では、身体活動による教育 (education through physical activities) である体育の分野である。

体育は必ずしも身体的側面にかぎることなく、身体活動又は大筋活動ならびにこれに関連するさまざまな反応を手段又は媒介として行なわれる教育の分野である。¹⁰⁾

身体活動による教育は、運動文化の継承と創造の機能を有し、人間のあらゆる側面との身体的、情緒的、社会的、知的、経験を通して、「全体としての人間」の形成を目的とするものである。¹¹⁾

このように、舞踊と体育との関係は、本質的に分離することは不可能な一体化した関係にある。

体育の目的は、身体活動を通じての完全なる人間教育であり、それはそ

のまま舞踊の目的である。舞踊は体育の目的、教育の目的を達成する多くの手段の中でも、最も有効で望ましい手段である。

舞踊教育は、舞踊を創造する全てのプロセスにおいて行なわれ、人間の心と身体の関係において行なわれる教育であり、心身の相関によってなされる教育である。

知的側面のみを強調する教科、身体的側面のみを強調する教科等による教育は、人間を廃人にし、社会をも崩壊させる。これを解決することは、20世紀後半、現代教育の課題である。

身体的にも心理的にも精神的にもバランスがとれて、調和的に発達した、理想的人間を形成することの可能な舞踊教育こそ、教育的価値の非常に高いものであり、極めて貴重な地位を有するものである。

人はすべての耐え難き仕事や苦痛を舞踊化して、人生を快適にする知恵をそなえている。又、そうしなければ、人間は一刻も生きていられないのである。現代生活の騒々しい雑音等の聴覚刺激、けばけばしい視覚刺激、めまぐるしい交通戦争や、ここ一・二年の間に世界に相次いで起こった大事件の数々等は、人をいやが上にも身体的、精神的ストレス状態においやるのである。しかし人は、生まれながらの知恵をもって、本能的にサイレンのけたたましい響きの中にもリズムを見出し、かろうじて生命の危機をとりとめている。こうして、生活の中の多くのストレスを克服し、全身の力をふりしぼり、心の叫びを訴え、人間の再建に立ち上がるのである。

こうして考えると、人間の生活はすべてが広義の舞踊であり、舞踊の運動といえる。ことに子供の生活は、舞踊の生活であり、幼児教育は舞踊を中心に展開されている。すべての幼児は、幼稚園に入る前から、すでに家庭において人間形成の舞踊教育がはじめられ、人間の生涯を通じて行なわれるのである。

では、舞踊教育において、創造性を育成するためには、どのような条件が望ましく、必要とするかを、Ⅰで考えたことをふり返りながら、具体的に考えてみる。

1. 舞踊教育とはいかなるものであり、その教育的価値のいかに高いか

を理解し、暖かい受容性をもち、積極的にそれを育成させていく自由な環境であること。

例えば、教育行政上の制度や組織のあり方は、舞踊教育の正しい発展のために、大きな影響を及ぼすものである。舞踊が理想的に、飛躍的に発展するためには、小・中・高校では国語や数学、音楽、美術等と同じように、一つの教科として独立することが望ましく、その価値と内容から考えると当然そうあるべきである。

現在、我が国においても、又世界のほとんどの国においても、学校では組織と制度の上で、舞踊は体育科に属している。¹²⁾ 現在の体育と舞踊は、考え方、方法論等において、共通する多くの要素を含み、歴史的にも相互交流しながら発展してきた。舞踊教育は、現在の体育の目標を達成するのに最も効果的であり、又教育の目標到達への最も直線的なルートである。今後、舞踊の正しい研究と発展により、又教育的見地から、正しく舞踊を理解しようとする自由な環境により、必ずや舞踊科として独立し、独自の発展をとげ、教育に、いや人類の発展のために、大きく貢献することであろう。

2. 豊富で高い文化的要素をもった環境であること。

舞踊はとくに、文化の総合的知識や経験を必要とする。豊かな文化の見学・観察・分析により、文化の心を把握し、豊富な思想や感情を育てることができ、それが舞踊創造の土台になるのである。そこからの創造でこそ、はじめて自己満足のみで終わることなく、人の心を感動させる客観的存在となりうるのである。文学、音楽、美術、科学等の文化的資質が高い水準にあり、その中にあって、真・善・美という文化的価値を追求することにより、舞踊の創造性を高めることができる。

そして舞踊は、こうした高い文化を受容する能力と、創造する能力を合わせもった人間を形成するのである。

3. 美 的 環 境

舞踊は、純粹に我々の日々の生活や大自然の中から、全人的感動としての美を創造することである。

美は人間の精神的作用であり、適切な刺激的環境は、人間の美的感受性をよびさまし、舞踊創造の源となる。

我々の五官に感受された対象の知覚が、形の上で統一と調和を見出した時、客観的存在としての、快い美感を形成しうるのである。こうした美的環境は、美的感受性や美的感動を生み、舞踊的イメージを構成していくのである。

4. 舞踊の社会的要請

新しい舞踊の誕生は、人間性の自覚と尊厳のもとに、人間の心の内から、自然の要求としてはじめられた。

バレエを中心とする踊りの型は、内容や個性の伴わない、形式的・類型的なものであり、人間性を無視して、身体を束縛し、畸形化させ、不自然な運動を強制して見せ物化したものであった。¹³⁾ そうした型からの解放により、人間の内なる魂を自由に感じ、考えたままに自由な身体の運動で表現することができるようになった。

こうした風潮は、体育においても、形式主義で、上からの教授中心形態の体育から、自主性や創造性を重視する、新しい体育としてぬりかえられることになった。

そして、学校における舞踊も、全人的教育としての身体活動という体育概念のもとに、舞踊独自の創造的自己表現が重んじられることとなった。そして、学校では、舞踊が小学校から取り上げられ、健康で美しい身体、豊かな感情や思想とその表現力など、生活を豊かにし、幸福な生活を営むことのできる人間を育成するために、行なわれることとなった。

5. 舞踊教育の目標、内容、方法について

舞踊教育の目標は、教育の目標である理想的人間形成をめざして、身体的にも心理的にも精神的にも、調和的に発達をとげた、調和的人間形成、文化を受容し創造することのできる独創的文化的人間形成、積極的に平和的な国家及び社会の建設に貢献することのできる社会的人間形成を目標とするのである。

これをもう少し具体的に考えてみると、

1) 健康で機能的な、美しい表現体としての身体を育成する

舞踊における運動は、自然運動であり、これは美しく合理的で、リズムや運動の法則に合致した運動である。¹⁴⁾ こうした舞踊運動は、循環機能をかきたて、筋緊張を減少させ、積極的に健康的な身体をつくる。

又、豊富な運動感覚や能力を育て、表現に必要な運動をつくり出すことのできる身体をもつくるのである。豊かな表現力をもった身体は、事物の生命を把握して、これを自己の身体運動で表現する表現体としての身体をつくることである。そして表現媒体としての身体表現は、身体的解放以上に心的緊張、内的緊張の緩和ができる身体をつくるのである。

2) 美的空間形成能力

舞踊における運動感・運動美は、そのほとんどが空間運動感・空間運動美である。

身体の運動を通して、人間の空間に対する感覚を把握する能力を養い、舞踊を構成するのに必要な、空間上の法則を知り、身体の運動によって、積極的に美的空間を形成していく能力を養うことが大切である。

3) リズム形成能力

リズムの定義は、「リズムとは、ある一定の強弱関係が二度以上繰り返された時にできるもの」¹⁵⁾ である。舞踊のリズムは、身体運動のリズムである。¹⁶⁾ 舞踊作品のリズムにはこのリズムの他に、舞踊作品全体の時間構成という、芸術形式の時間形態の把握や、時間構成の法則を理解することも含まれてくるが、舞踊リズムの基礎をなすものは、この運動のリズムである。

身体の運動を通じて、人間のリズムに対する感覚を把握する能力と、リズムの法則を知り、身体の運動によって、豊富で高度な動きのリズムをつくり出す能力を育成しなければならない。

よりよいリズムの構成は、運動を美的に、能率的に、かつ容易にするものである。

4) 即興能力

即興とは、直観的にもの（対象物）を感じ、それを直観的に表現するこ

とである。

それぞれ表現方法は異なるが、即興は創造活動上、大きな意義をもっている。

舞踊における即興は、直観的に感じたものを、直観的に身体運動で表現することである。創造活動では、その過程においては、種々な思考活動が行なわれて一つの作品が出来上がるのであるが、その最初の過程において、概念によって媒介されない、直接的な観察ないし認識の作用によって対象を感じとり、それを直接表現に結びつけることが行なわれる。そこに創造の動機となるようなものをとらえることができる。

このように内的にとらえ、それを一つの形として表現する活動がもとになって、作品が形成されるのである。故に即興は創造の源ともいえる。

この即興能力は、対象に直観的にものを感じる直感力、これには人間の聴覚や視覚、触覚等により、感情的に直接感じとるものと、対象の意味を直接認識するものと、想像力により自己の内にもものを直接観るものと、芸術的「天才」にみられるように、幻のように対象が直接感じとれるものとが考えられる。¹⁷⁾ この直観力を伸ばすことと、直観的に感じたものを直観的に表現する能力を伸ばすことの二つが大切である。後者の方は、豊かな運動能力や舞踊的イメージを育てることと、それを心理的にも自由に表現できる能力を養うことが必要である。

5) 独創的表現能力

身体運動の限界によってのみ拘束されても、古い因襲や伝統、制度によって拘束されることなく、すぐれた美的感受性と、豊かな感情や思想等により、対象を客観的にとらえ、身体運動による情動的体験の直接的伝達として、自発的かつ独創的に表現する能力を育成しなければならない。

6) 創造的能力

舞踊における創造的能力は、人間の身体運動を素材として、純粹に美を創造することのできる能力である。

自然や生活の中から対象を、鋭敏な心と感覚で美的対象としてとらえ、それをすぐれた舞踊的イメージとして発展させ、独自の美形式で構成し、

創造的世界像をつくり上げ、さらに、他人と自己の世界を分かちあうことのできる能力なのである。

7) 審美的能力

舞踊における審美的能力は、舞踊を鑑賞する能力であり、舞踊作品の鑑賞を通して、美を創造する能力、美的価値を自己の内につくる能力である。¹⁸⁾ それには、舞踊に対する知識が豊かであり、高い教養をもち、創作体験のあることが必要である。偏見や先入観をとり去り、肯定的、受容的、建設的態度でのぞむことにより、自己の内に他者を体験でき、共感が求められるのである。そして、広い視野に立って、全体的にその心をくみとることにより、心の内に深い感動と純粋な美を発見することができるのである。

そして舞踊教育の内容や方法は、その目標を達成するために最も適合したものではなくてはならない。指導の方法も、舞踊の知識や技術を形式的画一的に教えこむというのではなく、生徒の舞踊創造のための潜在能力を見出し、自主的に発達させていく民主的方法によらなくてはならない。

そしてそれらは、人間の発達段階に応じたものであり、地域社会の特殊性を考慮に入れて考えられなければならない。

こうして普遍的目標をもった舞踊教育は、すべての人に平等にその機会が与えられなければならないし、それは生活をより豊かにし、幸福な人生をおくることのできる人間を育てるものである。

6. 固定観念

舞踊における教育の世界でも、古い舞踊観念に基づいた誤った指導が、未だに強く根をはっている。例えば、

- 体育的という名のもとに、運動量があり、汗を流す活発な動きの多い踊りを教えこむことで終始する。
- 創作的という意味をはきちがえ、自分が創作した踊りをおどらせて満足する。
- 西洋ダンスのステップやバレエの基本練習等の特殊な技巧を教えこみ、舞踊の基本運動と考えている。

- 音楽に合わせて踊りさえすれば、リズム感が発達すると思っている。
- メトロムとリズムとの区別を理解せず、混合して考え指導している。¹⁹⁾
- 参考作品という名のもとに、即製の作品を教師が講習会等で覚えてきて、それを教えこむことに終始する。²⁰⁾
- 日本の幼稚園や保育園のほとんどが、児童舞踊という、古い舞踊形態のものを大きく教材として取り上げている。これは童謡に大人が踊りを振り付けた舞踊のことであり、大人の型を子供の心にはめこむものである。²¹⁾
- 舞踊は女子のするものであり、男子のするものではないという迷信は、今でもなかなか根強く心の中に残っているものである。²²⁾

日本舞踊の振り、バレエの技巧、学校の即製作品等、女子のための踊りが今まで比較的多かった。そこからのイメージによる先入観や自己観念で、又、教師の研究不足や指導能力の不足から、男子を舞踊から遠ざけさせるのである。

舞踊は他の教科と同じように、男女共に、同じ価値と必要と可能性をもつものであり、正しい舞踊の理解と指導により、男子が自主的に活発に創作活動に参加し、創造性を育て、その喜びを経験することができるのである。

こうした多くのゆがんだ固定観念のとりこになっていることは、教師自身を破滅させるのみでなく、生徒を一定の型にはめこみ、自主性、創造性をうばい、自由で柔軟な思考力を破滅させてしまうのである。

7. 舞踊教育にたずさわるもののあり方

舞踊教育を担当するものは、舞踊教育についての正しく広く深い知識と、高い技術を合わせもっていることが必要である。

そして舞踊を愛しており、鋭く豊かな感受性をもち、独創的であり、自己の内に潜在する舞踊的潜在能力を発現することができてこそ、はじめて子供のそれを見出し、育てることができるのである。そして舞踊を科学的に研究する意欲をもち、正しく優れた指導能力を有していることも大切で

ある。又、6で取り上げたような、舞踊に対する誤った固定観念で自己の舞踊観念をつくり、生徒を拘束したりすることは、断じて許されないことである。

8. 発 達 段 階

舞踊の教育も、子供の身体的精神的発達に適合して行なわなければならないのは当然である。そしてそれは、生命の起こりと共に行なわなければならない。

幼い子供の生活は、そのほとんどが舞踊の生活といえる。彼等は常に、身体活動を通して人間形成のための基礎的な能力を体得するのである。

普通一・二歳以前の子供は、まだ自分の足で自由にころばずに歩くことはむつかしい。身体運動を通しての表現活動である舞踊の積極的指導は、ころばずに自由に走ったり、律動的反応をすることのできる二歳頃から行なわれることが望ましい。それ以前の子供は、自己の身体運動自身の限界に拘束されるため、その可能な範囲で、適切な刺激的環境を与え、全身で豊かな鋭敏な美的感受性や表現力を養い育てることが大切である。

多くの子供は二歳頃から、感覚的・運動的な遊びや模倣的な遊びをはじめだす。²³⁾ 活発で、はっきりした音楽を好み、身体をそれに合わせて自由に動かして喜ぶ。又、口で効果音を出しながら、具象的なもので、自分の好きな動くものを題材にして、その動きの特徴をとらえて表現しながら走りまわったりする。

二歳半になる頃から、爪先で歩いたり、両足をそろえて跳んだり、階段や高い所から跳び降りたりすることに興味をもつ。音楽に合わせて1・2人の友人と踊って喜んだり、動きの特徴のとらえ方も、部分的ではあるが的確になり、個性的な表現をしたり、人の注目をあびるよう動きを強調したり、声を出したりする。しかしまだ興味は持続しない。

三歳になると意味をもった動きをし、意味に合わせて早く歩いたり、走ったり跳んだりする。

四歳ともなると、運動も非常に活発になり、興味も広く、知識欲も旺盛になり、積極的に創造活動を好むようになる。他の者の簡単な運動なら、

見ていると正確に自分で再現できるようになる。自己を表現することを好み、自分で主題を選択して動きを表わし、それを人に見せたがる。そして興味をもつとかなり長時間その活動に没入して行なう。自分の選択する主題も、主として動的なもの、例えば、乗物、動物、人物等から静的な自然現象や感情なども取り上げる。その動きは、一つか二つのモチーフとなる動きのくり返しが多く、口で効果音を加えながら夢中で行ない、その中に喜びを見出すようになる。

五歳では、律動的で快適な音楽に合わせて行進したり、止ったりして楽しむ。身体活動の自由さが増し、むだがなくなり、自分で動きを調節できるようになる。

六歳では、元気に自信をもって活発に動きまわり、自分の限界を越えた運動まで試みてころんだりもする。歌いながら、身体を律動的に音楽に合わせて自由に動かしたりできる。

こうして幼児の各時期の特性を見て、全般的にいえることは、幼児は動的で、活発な律動的なものを好む傾向が強いため、こうした中からの美を発見させるようにしたい。そして表現するものになりきって、没入して行なわせることが望ましい。適切な刺激で興味を持続させ、自己の能力の限界に挑戦させたり、子供の努力をほめたり、はげましたりして自信と勇気をもたせるようにしたい。又、幼児は自己中心的になりがちである。心を外に向け、他人の良い点を発見させ、仲よく協力して楽しく遊んだり、創造活動ができるよう導きたい。さらに、個性を大切に、彼等の興味や欲求を満たし、美的感受性を高め、彼等の内なるものを、自主的・独創的に表現する能力を発現していくようにしたい。

小学校一・二年では、はじめの頃は幼児的表現が維持された状態で、目に見えるいろいろなものの特徴をとらえて、スケッチ風に表現するものである。題材も、動くものや物語などを律動的に、自己を没入させて、しかも二・三人の友人と仲よく交替しあったりして表現する。二年になると、積極的に題材を見つけ、二・三人の友人と一つの題材を役割を分担し、協力して表現する態度ができ、その喜びを知るようになる。²⁴⁾ 自然や動物、

又生活を観察させ、そこからの感受性を養い、協力して自主的に工夫して表現できるよう導きたい。

小学校三年では、題材が非常に豊富になり、正確な運動ができるようになってくる。しかしまだ、一つの作品としてのまとまりはなく、スケッチ的に次々と表現していく。題材に対する男女の好みの差も現われてくるし、個人差もでてくる。そして三・四人で分担して活動することができるようになる。²⁵⁾ 没入して表現できる雰囲気をつくり、個人差や男子のとり扱いに注意し、のびのびした正確な運動ができるよう考慮したい。

小学校四年では、題材はますます広くなり、表現も意識的に自覚して行なうようになる。積極的に技術を練習したりでき、グループも人数が増加し、男女の動きの特性を生かして役割を分担し、全体的な構成をする能力もできてくる。自分の表現や行動を、もう一人の自分でながめながら、自己の力を出し切ったの、能力の限界への追求を好むようになる。²⁶⁾ グループ活動も、活発に協力的に行なわせるよう導き、日々の生活の中で、観察力を養うようにしたい。

小学校五年から六年の前半頃は、自己の身体的特徴や個性に適した、しかも自分で意図的に題材を選択し、内容を具体化させ、客観的に自己を観察しながら、一つのまとまりのある作品を創作することができるようになる。この頃になると、運動能力もかなり高くなり、個人差もはっきりして、男女の好みの相違も一層はっきりと現われてくる。感情等、内面的なものの表現もできるようになり、身体表現を効果的にするために、音楽、衣裳、照明等にも関心が現われてきて、美的に表現する能力もできてくる。グループ活動も、意図的に活動的に、しかも個性を生かして行なわれるようになる。²⁷⁾ 個性を尊重し、グループ活動の中でそれを生かし、協力して一つのものを創造する喜びを知り、それを生活の中に生かし、豊かな精神生活が出来るようにしたい。小学校六年後半では、軽快、活発な動きから、柔軟で優美な動きや、抽象的なものへと移っていき、心身共に著しい発達この時期は、子供に不安や動揺を与える。男子は想像的で未知のものへの追求や、力強い表現を好むし、女子は優美で夢想的な世界に魅せ

られる。作品の主題や内容のとらえ方も的確になり、まとまりのある作品が作れるようになる。鑑賞能力もできてきて、美的価値を理解するようになる。²⁸⁾ 個人の特性を伸ばすと同時に、友人の長所を伸ばすよう働きかけ、小さな問題でも必ず最後までやりとげさせて、成功の喜びを知らせ、自信をもたせるよう、適切な指導が必要である。

中学では、急激な身体的発達で、身体各部のバランスがくずれ、思ったことをうまく表現できない。感情の動揺がはげしく、自我意識が強くなり、自己や社会に批判的になり、親友を求めたり、新しい経験や知識を得るのに意欲的になり、自己の人生観・世界観の理想をつくり上げる。美的感受性も高まり、純粋に美を追求する芸術に憧れたりする。羞恥心もでて、個人的表現よりグループによる表現を好む。²⁹⁾ グループ活動を中心に、自信をもたせたり、適切な刺激で興味を持続させたり、協力的態度で行なうよう指導したいものである。

高校期は、身体的にもバランスがとれてきて、巧緻性を要する運動もできるようになり、複雑な感情表現も好むようになる。³⁰⁾ 舞踊に対する知識を深め、豊かな美的感受性を育て、円滑なグループ活動により、人間形成の価値を知らせたい。

以上、発達段階に応じた舞踊教育のあり方の概要を考えてみたが、これをさらに内容、方法において具体化さも、よりよい方向へ展開させていかなければならない。

結 語

以上、教育による創造性と、その中でも最も創造性に関連のある、しかも、教育の手段として最も効果的な舞踊における創造性について、その開発の要因となるものをいくつか取り上げて考察してきた。

創造性の開発は、自由な創造的風土と、豊かで高い資質の文化的要素と、適切な創造的刺激のある環境と、創造性に対する強い現代社会の要請と、固定観念に拘束されない柔軟な考え方と、創造性豊かな有能な教育者

による適切な教育が展開されてこそ、全面的に実現可能となるのである。

古い秩序が音をたててくずれていく中で、現代人は常に、いつ、どこで、何が起こるか全くわからない不安な状況におかれている。その中において、創造のための貴重な時間を費してこそ、真の人間の勝利を勝ち得ることができるのである。

そして我々は、人間の創造能力を、あくまでも、人類の福祉と平和のために役立てねばならないのである。

参 考 文 献

- 1) 「創造」創刊号 (1968・5) No. 1, 米国における創造的人間についての展望 (1), 石井完一郎, p. 65.
- 2) 講座・創造性の教育 2 「創造性の測定と評価」小学生の創造性, 渡辺俊雄, p. 255, 1968.
- 3) ヴァン・ファンジェ (加藤八千代・岡村和子訳) 「創造性の開発」岩波書店, 1963, p. 14.
- 4) 横地 清「幼児教育の方法」三省堂, 1968, p. 14.
- 5) 講座・創造性の教育 2 「創造性の測定と評価」幼児の創造性 阿部智江, 1968, p. 244.
- 6) 「人間とは何か—脳生理学の立場から」時実利彦 人間の科学 第2巻第5号, 1964, p. 89~93.
- 7) 波多野完治「創作心理学」大日本図書, 1966, p. 24.
- 8) 同 上。
- 9) Torrance, E. P. ; Education and the Creative Potential ; The University of Minnesota Press, 1963.
- 10) 「新体育辞典」岩崎書店, 1964, p. 1.
- 11) 同 上。
- 12) 邦 正美「教育舞踊原論」1960, p. 185.
- 13) 同 上, p. 57.
- 14) 邦 正美「舞踊」万有出版, 1954, p. 86.
- 15) 同 上, p. 110.
- 16) 同 上, p. 108.
- 17) 「美学事典」竹内敏雄編 弘文堂 1966, p. 161.
- 18) 邦 正美「教育舞踊原論」万有出版, p. 40.
- 19) 同 上, p. 95.
- 20) 同 上, p. 175.

- 21) 同 上, p. 197.
- 22) 同 上, p. 88.
- 23) 松本千代栄「舞踊美の探究」大修館, 1961, p. 216.
- 24) 同 上, p. 227.
- 25) 同 上, p. 229.
- 26) 同 上, p. 233.
- 27) 同 上, p. 239.
- 28) 同 上, p. 250.
- 29) 同 上, p. 256.
- 30) 同 上。